

カット ←

5,522

→ カット

400% = up
1x2x2

・カラー

・左頁上半分に、
限度一杯はみ出して
掲載下さい。

↑ カット

・月を小さく(ないで)下さい。

・空を、濃い青色の
部分のN夕にて下さい。

・月のかたむきも、この写真
と同じにて下さい。

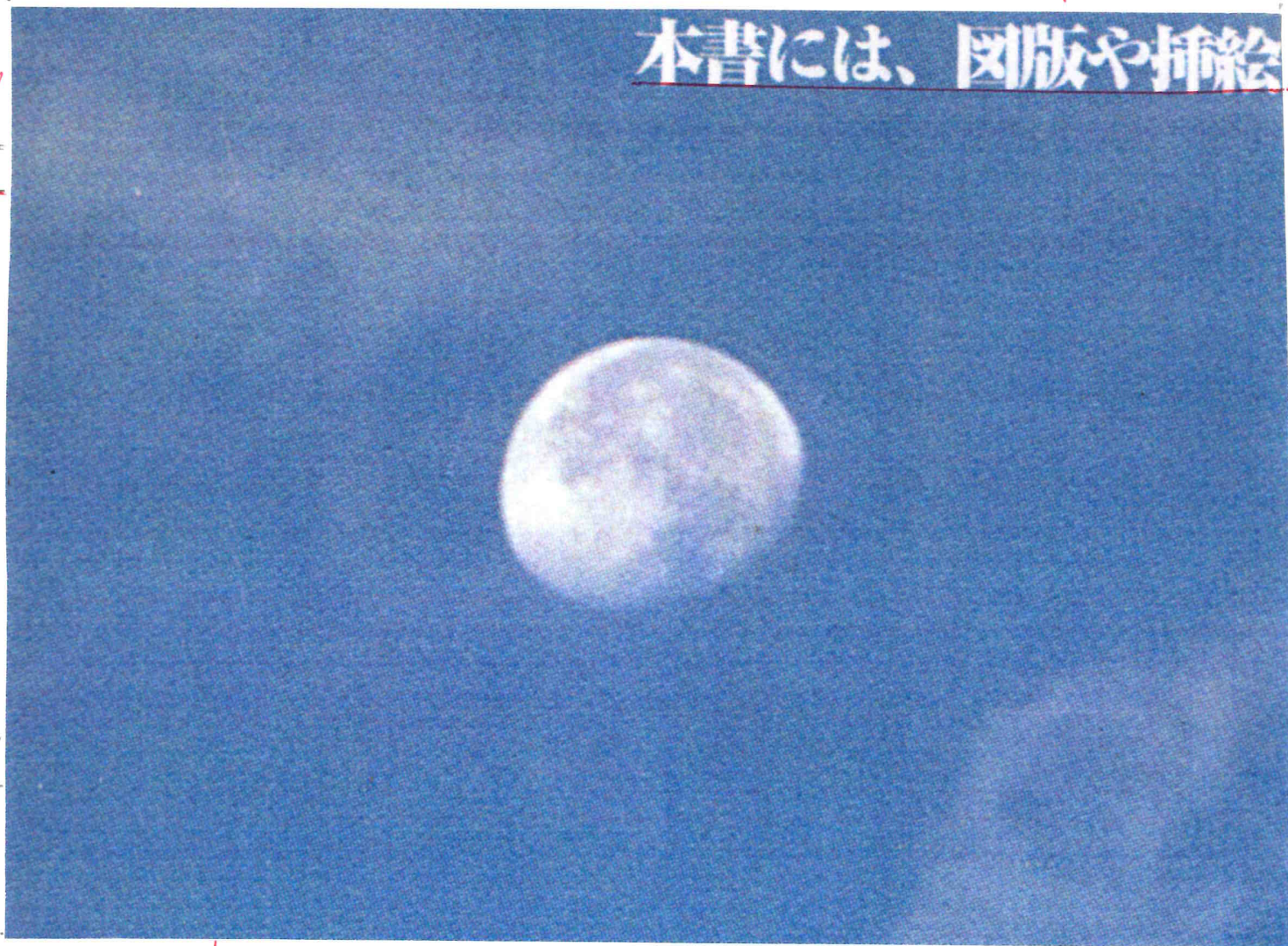


・月の輪郭部分は、
現在のママで結構
です。(シャープにしないで
下さい)

↓ カット

本書には、図版や挿絵

基準線



14QQ

写真図版 803 有明の月

12QQ 13QQ 『月の本』 林完次 角川書店 2000年9月30日再版発行 11頁参照

・平成27年(2015)10月31日(陰暦9月19日)の日出6°17'以降に撮影した有明の月(月齢18.1)と色・形共にほぼ同様
・なお『いまちがき』(陰暦18日の月)は枕詞にて「明(・明后)」にかかる(広辞苑) 180

序アキ

遥拝する
白王居でも十月十七日に取所親祭
伊勢神宮を

六日 内宮では十六日
外宮では毎年十月(旧曆九月)十五日
「外宮では毎年十月(旧曆九月)十五日」
「内宮では十六日」

因みに述べると伊勢神宮の日神嘗祭に
ちな

795番歌参照

である。(万巻十一二三〇下)拾遺和歌集
君が来まさば 水恋ひめやも
九月の 有明の月夜 ありつつも
なお、本歌は、柿本人麻呂の
な お、本歌は、柿本人麻呂の

「広辞苑へめ」へ「已然形」参照

の「へば」さうけ「確定条件を表わして」
「めしは、ムの已然形。君し来まさば」
詞である。(「広辞苑」へ「参照」)

「しは、上の語を強く指示して強める助

照) 大正二年七月二十日再版発行 下 一〇二頁 参

「何という調子の好い歌でしよう」
絶唱とも称す 小野小町論 黒岩涙香 朝報社
「何という調子の好い歌でしよう」
絶唱とも称す 小野小町論 黒岩涙香 朝報社

5562? 在 和 3 年 (887) 6 月
小 野 氏 娘

886 46 3
841 1 1 45
45
HNW

平凡社〈竹取物語〉参照)
●また、『竹取物語』は、源氏物語(絵合)に「物語の出で来はじめの祖」と記されているように、十世紀後半以後さかんに作られることになる物語文学の先駆的作品となつたのだった。(史料による日本の歩み)古代編、吉川弘文館三三五頁。「竹取物語・伊勢物語・大和物語」日本古典文学大系、岩波書店、五頁参照)

光孝天皇の寵愛

新たな年、光孝天皇の仁和二年(八六〇)の春を迎えた。嬉しい、心ときめく春であった。

時に、光孝天皇は五十六歳、小町は四十六歳であつたらうか。
【第 547 表】**光孝天皇(参照)**

- ①「散位従五位下小野朝臣千里爲」山城介」
- ②「散位従五位下小野朝臣當岑爲」周防守」

とあり、この記事が、仁和二年から三年にかけて多数見られる「小野朝臣」任官記録の端緒をなすものである。

●『三代実録』仁和二年及び三年条に見られる「小野朝臣」任官記事の回数を数えると、仁和二年に、七回(四名)

5,525^P

●仁和三年に、五回(四名)小野氏一族が際立つて幅広く引き立てられている、といえよう。

●『三代実録』清和・陽成・光孝朝の記録中に見られる「小野朝臣」任官記事の【掲載回数】を示す一覧表を掲げてみよう。

●この表で特に目を引くのは、光孝天皇の仁和二年から三年にかけて、小野氏一族の任官記事が頻出する

ということである。この物語では、

《仁和二年の春頃から、翌三年八月の退位迄の間、光孝天皇は、愛する小町の爲に……その一族に恩恵を及ぼされ

と考えてみたい。(第九十五章〈光孝天皇の淡い想い〉の項、光孝天皇の「為人」(慈仁寛曠。親愛九族)参照)

とはいえこの当時は、藤原氏に遠慮せざるを得ない、思うにまかせない時代であつた。

だから、小野朝臣を重要な官職にいきなりの抜擢するといふわけにはいかなかつたであらう。

しかしそれでも、光孝天皇は、小野氏一族の多くを引き立ててやらずに、おれに氣持でおいでだったのだらう、

2012.6.10 夜 13 巻 220 頁下 44 行

右頁の上(右側)

下に掲載

① 5431~2
水野小町の肖像を
左頁に配置する

5,526 P



第547回 光孝天皇

『皇室大百科』朝日通信社、昭和50年3月10日発行、223頁参照

年表59
『百人一首』学習研究社 38頁に光孝天皇のカラー有り(探出筆)也土男才至303也x

左頁全面に、ホホ、出た大主への掲載が主。

2ボクダ
177ボクダ

543p 79p

第1表 『三代実録』清和・陽成・光孝朝に見られる「小野朝臣」の任官記事一覧表

天皇	和暦	西暦	当考	葛紋	春風	春枝	後生	間道	千珠	千里	千邦	喬木	圓梁	任官件数 (人数)
清和天皇	天安 2	858												
	貞観 1	859												
	2	860				1			2					3 (2名)
	3	861											1	1 (1名)
	4	862												
	5	863				1							1	2 (2名)
	6	864								1				1 (1名)
	7	865												
清和天皇	8	866												
	9	867					3							3 (1名)
	10	868												
	11	869												
	12	870			2	2		1					1	6 (4名)
	13	871												
	14	872												
	15	873												
	16	874												
	17	875												
陽成天皇	18	876												
	元慶 1	877												
	2	878			1	1								2 (2名)
	3	879												
	4	880												
	5	881												
	6	882												
	7	883												
光孝天皇	8	884												
	仁和 1	885								1			1	2 (2名)
	2	886	2				1		2			2		7 (4名)
	3	887			2				1	1	1		5 (4名)	

【参考資料】『日本三代実録索引』吉川弘文館

※ 表中の数字は、任官の掲載回数を示す。

5,527^p

185

と拝察される。

なお参考までに、仁和二年正月十六日から後の「小野朝臣」の任官記事を列記しておくことにしよう。

仁和二年（八八六）

- ③二月二十一日。散位従五位下小野朝臣喬木ヲ爲ス二 凶書頭ト。
- ④同二月二十一日。周防守従五位下小野朝臣普岑ヲ爲ス二 鑄錢司長官ト。
- ⑤同二月二十一日。従五位下行山城介小野朝臣千里ヲ爲ス二 伊勢權介ト。
- ⑥六月十三日。従五位上守刑部大輔小野朝臣後生ヲ爲ス二 攝津守ト。
- ⑦六月十九日。従五位下小野朝臣喬木ヲ爲ス二 刑部大輔ト。

仁和三年（八八七）

- ①二月二日。従五位下守刑部大輔小野朝臣喬木ヲ爲ス二 山城守ト。
- ②三月八日。以テ 玄蕃頭従五位下小野朝臣千邦ヲ爲ス二 右京亮ト。
- ③同三月八日。従五位下行伊勢權介小野朝臣千里ヲ爲ス二 因幡權介ト。

○四月十三日。少弐正六位下小野朝臣連峯ヲ爲ス二 大學大

允ト。

④五月十三日。散位従五位上小野朝臣春風ヲ爲ス二 大膳大夫ト。

夫ト。

⑤六月十三日。従五位上守大膳大夫小野朝臣春風ヲ爲ス二 攝津權守ト。

津權守ト。

とある。「三代実録」。「日本三代実録索引」六國史索引(四)吉

川弘文館〈小野朝臣〉参照

なるほど、

〈これらの「小野朝臣」の任官記録こそ、……小野小町が寵愛を受けていたあかしだ〉

と見るには、その回数がまだ少ないような感もある。

だが、もしも光孝天皇の御代が長かったならば、小野氏

一族の任官記事は非常な数になったであろう、とも想像さ

れる。

*

ここに思い起こされるのは、——光孝天皇の仁和二年

(八八六)よりも一四〇年ばかり前の唐の国の絶世の美女

「楊貴妃」と、「玄宗皇帝」との恋愛を歌った『長恨歌』で

ある。

こういう。

5,528P
↓ 長安の教に絶へ

漢皇色を重んじて傾國を思ふ。御宇多年求むれども得ず。

楊家に女有り初めて長成す。養はれて深閨に在りて人未

だ識らず。天生の麗質自ら棄て難く、一朝選ばれて君王

の側に在り。眸を回らして一笑すれば百の媚生じ、六宮

の粉黛顔色無し。春寒くして浴を賜ふ華清の池。温泉水

滑かにして凝脂を洗ふ。侍兒扶け起せば嬌として力無し。

始めて是れ新に恩澤を承くるの時。雲鬢花顔金步搖。

芙蓉の帳暖かにして春宵を度る。春宵短きに苦しみ日高

くして起く。此れ従り君王早朝せず。歡を承け宴に

侍して閑暇無く、春は春遊に従ひ夜は夜を専にす。後宮

の佳麗三千人。三千の寵愛一身に在り。金屋妝成つて嬌

として夜に侍し、玉樓宴罷んで酔つて春に和す。姉妹

弟兄皆士を列ね、憐れむ可し光彩の門戸に生ずるを。遂

に天下の父母の心をして、男を生むを重んぜずして女を

生むを重んぜしむ。

楊貴妃の出身および入内の過程は、白居易が詩中で述べ

ているほど簡単なものではなく、紆余曲折があるのだが、

それをいわないのは、天子に対するはばかりと、恋愛その

ものをより神聖にし、美しいものにして、『長恨』の意味

を深からしめんとする意図によると思われる。

貴妃は、幼名を『玉環』といひ、開元七年(七一九)に

蜀州の司戸参军楊玄琰の娘として生まれたが、早くに両親

を失ひ、叔父の家で養われた。後、開元二十三年(七三五)、

十七歳で玄宗の第十八皇子寿王李瑁の妃となり、これが玄

宗に見出されるきつかけとなる。

開元二十四年(七三六)に武惠妃を失つた玄宗皇帝は、

日夜樂しまず、たまたま驪山の温泉に行幸した際、高力士

に命じて外宮をさぐらせ、寿王の妃を得た。

玄宗は、この妃に道教の得度を受けさせ、女道士『太真』

として、宮中に入れた。

太真は、歌舞音曲に通じ、よく玄宗の意にかなつたので、

その寵愛は日々に深まり、ついに天宝四年(七四五)冊せ

られて貴妃(皇后を助ける正一品の女官)となつた。時に、

貴妃は二十七歳、玄宗は六十一歳だつた。

この後、楊貴妃の一族は、みな高位にのぼつた。

玄宗は、楊貴妃におぼれて政治をかえりみないようになつ

た。

開元の治とたたえられた玄宗の治世も、晩年には、天子

の倦怠、宰相李林甫や、楊貴妃の一族楊国忠らの横暴によ

り、表面的平和にもかかわらず、政治・経済・社会の不安

が内在した。

安禄山が、宰相楊国忠との不和から天宝十四年(七五五)

5,529P

小林 大燕 266

根拠地が燕とあることは、
魚腸

881
上 358
647
5672510
英士に追ふ

に反乱を起こすと、たちまち大乱となった。

楊貴妃は、玄宗に従い蜀に向かう途中、馬嵬(陝西省興平県馬嵬鎮。長安の西約六〇き)の仏寺の庭において、縊死

させられた。(漢詩「藤野岩友、旺文社、二三頁。「東洋史辞典」創元新社「楊貴妃」(安史の乱)参照)

なお、『長恨歌』は七言、百二十句、八百四十字の長篇で、白詩の特質である平易流麗な面が遺憾なく發揮され、

豊かな情感の持主白居易(七七一〜八四六)の浪漫的恋愛観を見るに足る作品である。

作詞の動機については、陳鴻の『長恨歌伝』に詳しく次のように記されている。

「元和元年(八〇六)冬十二月、樂天(居易)は、藍屋の尉となつて赴任してきた。この地には、陳鴻と王質夫とが

三人は、余暇をみて、仙遊寺に遊んだ。話かたまたま玄宗と楊貴妃との悲恋におよび、相共に感嘆した時、王質夫が、

『世にもまれなこの事柄は、天才の筆によらなければ、時と共に消滅してしまつたらう。君は詩にすぐれ、また情愛も深い才人だから、一つ試みに作詩してみてはいかがです

か』

と勧めた。

そこで、白樂天(白居易)が『長恨歌』を作り、陳鴻が『長恨歌伝』を作った

という。(漢詩「藤野岩友、旺文社、二三八頁参照)つまり、光孝天皇の仁和二年(八八六)より八十年前の

元和元年(八〇六)頃、――白樂天は、『長恨歌』を作りはじめたのだった。

まさしくこの『長恨歌』の一節と同様

〈光孝天皇は、小町を見初めてこよなく寵愛され、……必然的に、小野氏一族の者達が皆士を列ねることになったの

である〉と想像される。

そして又、『三代実録』等に記されてはいないが、あるいは、

〈小野小町の父良実は、この頃(参議もしくは三位以上)とされた

ということなのかも知れない。なお小町は、

〈仁明天皇の承和八年(八四二)に生まれた〉とすると、仁和二年(八八六)には四十六歳だったことに

5,530 P

227
886
841
45
46
45

886
806
80

なる。

そしてこのとき小町の父良実(たしざね)は、六十七歳前後であった

ろうと思われる。

もっとも、この当時迄、父良実が生きていたのかどうか

は分からない。

もしかしたら、小町の父良実(たしざね)は、追贈(ついぞう) (死後官位を贈る

こと) されて『卿(きやう)』となったのだろうか。しかし、……い

うまでもなく詳(しょう)らかでない。

『三代実録(さんだいじつろく)』仁和二年(八八六)の記録を見ると、

■正月二十一日条に、「内宴(ないえん) 奏(そう) 女楽(にょがく) 喚(めづ) 文人(ぶんじん) 賦(ふ) 詩(し) 如(ごと) 常(じょう)。賜(たま) コトヲ 綿衣(わたぬい) 有(あ) 差(さ)」

■三月二日条に、「天皇聖體不豫(てんかうせいだいふよ) (御病氣(ごびやうき))」

■三月五日条に、「帝近日聖體乖(ていじんじつせいだいがい) 和(わ) 是日平復(このひへいふく)」

■四月十八日条に、

「此日(このひ) (毎日) 天氣陰寒(てんきいんかん)。人着(ひとぎ) 綿衣(わたぬい) 是日(このひ) 天顔(てんかんでん) 清朗(せいろう) 有(あ) 二 溫氣(おんき) 一」

とある。

是(こゝ)の日(ひ)、光孝(こうこう)天皇(てんかう)はよほど嬉(うれ)しくて、しかたがなかった

のであろう。天顔(てんかんでん) (天子(てんし)の顔) は清朗(せいろう) (きよくほがらか) に

して、溫氣(おんき) (あたたかみ、暖気) があった、というのである。

5,531 P

あるいは、

「始めて是(こゝ)れ新(あらた)に恩澤(おんたく)を承(う)くるの時(とき)」

のことを、このように述べているのではないだろうか。

即ち、是(こゝ)の日(ひ)、光孝(こうこう)天皇(てんかう)は、小町(こまち)を妃(きさき)とされたのかも知

れない。

その童顔(どうがん)が、清朗(せいろう)ながらも少々(しょうしょう)上気(じやうき)して、火照(ほて)っていた

のであろう、と推察(すいさつ)される。

そしてこれよりのち、長恨歌(ちやうこんか)の描写(びやうしや)を思わせるような、

「雲鬢(うんびん)花顔(わがん)金赤(きんせき)揺(ゆる) 初夏(しよか)の宵(よ) (日が暮(く)れてから夜中(よなか)に至(いた)るま

での間(ま)の) 短(た)きに苦(くる)しみ、日高(ひたか)くして起(お)く。歎(なげ)を承(う)け宴(えん)に

侍(じ)して閑暇(かんか)無(な)く、種(くさく)種の遊(あそ)びに従(したが)ひ夜(よ)は夜(よ)を専(せん)にす」

といった楽しい日々(び)が打ち続(うちつづ)いていったように思われる。

*

ではここに、「群書類(ぐんしゆり)徒(た)」の文筆部(ぶんぴつぶ)におさめられている

『玉造(たまぞう)小町子(こまちこ)壮衰書(そうすいしよ)』の長文(ながぶん)の中から、処(ぢよ)処(ぢよ)抜粹(はつすい)してみよ

う。

花帳(はなとざ)の裏(うら)に籠(かご)せられて外戸(あひ)に歩(あ)まず。珠簾(たまざら)之内(のうちに)に愛(あい)せら

れて傍(たもと)の門(かど)に行くこと無(な)し。

朝(あした)には鸞鏡(らんきやう)に向(むか)ひ蛾眉(がび)を点(てん)じて容貌(ようぼう)を好(よ)くし、暮(くれ)には鳳(ほう)

釵(せんざい)を取り蟬翼(せんだよく)を画(か)きて艶色(えんしよく)を埋(う)るふ。

面(おもて)には白粉(おしろい)を絶(た)たず、顔(かほ)には丹朱(に)を断(た)つことなかりき。

小町子 256

5582F
15行

5534F
11行

桃の顔は露に咲みて、柳の髪は風に梳つる。
楊貴妃の華眼も奈ともなしえず、李夫人(前漢第七代武
帝の夫人)の連睫をも屑ともせず。

細袖は飄飄て彩雲の翠嶺を廻るが如く、綯杖は暎暎て
碧浪の蒼濱に置めるに似たり。(写真図版804「彩雲」参照)

綺羅地を照らし、光色天に翻る。
巫峡の行雲は恒に襟上に有り、洛川の廻雪は常に袖中に
廻り。

花の時を待ちては玉筆をとりて紅椀紫藤の和歌を詠し、
月の夜を迎へては金絃を操つて鶴琴竜笛の妙曲を調ぶ。

口に鳳凰の管を吹けば梁塵廻りて声斜なり。
手に鸚鵡の觴を取れば漢月(天の川と明月)落ちて影靜
かなり。

君臣の子孫は婚姻を日夜に争ひ、富貴の主客は伉儷を時
辰に競ふ。
然れども

爺嬢は許さず、兄弟は諾ふこと無し。
唯王宮の妃として献らむといふことの議のみ有りて、
専ら凡家の妻として与へむといふことの語は無し。

5,532P

十七歳にして悲母を喪ひ、十九歳にして慈父を殞す。
富貴は天の与ふる所なり、東西南北の雲色定まらず。
愛樂は人の感ずる所なり、生老病死の風の声常なし。

且は樂天(白樂天、白居易のこと。長恨歌等で知られる)
秦中吟の詩を学び、且は幸地嶺上詠の賦に效ふ。
韻を古調に造りて、詩を新章に賦せんと云ふこと爾なり。

寡孤(夫のいないやもめぐらし)にて年を送る処、嫁ぐ
に一狎師(とらえる人の意か。つまり光孝天皇のことであ
ろう)を得たり。

狎師に二婦あり、孤妾に一婢なし。
二妻互に咒咀し、一身自ら憂悲す。

憂悲して日を過す程に、一の男児を産み得たり。
男児の容顔は美しくして、妾が身は形体衰へたり。
我が形の瘦せたるを歎くこと無く、子の兒の肥えたるを
思ふことのみ有り。

秋の霜に素髪を梳り、晝の浪に黄髭を洗ふ。
唇は膠れて朱の潤無く、面は皺になり粉滑かならず。
日暮れば荒れたる閨に眠り、朝闌くるまで壊れたる扉に
伏せり。

(このあたりは、大江惟章を夫としていた頃のことを述べて
いるのであるか)

5551F
下未了

5513F
190行

190

小野小町 229頁上4行

5.533P

- ・カラー
- ・1頁の上半分に掲載下さい。

朝日H23 (2011)
7月16日(土) 朝刊



この字はかまよい。

カット

この字は、ヤメル

↓カット

^{さいり}彩雲現る 松野忠男さん(石川県=全日写連会員) 5月8日付

トル

動物園で写真を撮ろうと松野さんが入り口に差し掛かったとき、見上げた空に虹のようにきれいな彩雲が見えた。望遠ズームで10枚ほど撮影。2、3分で薄くなり、そ

のうち消えた。彩雲は、晴れた日、太陽のそばに薄い雲がかかった時に、雲の粒にあたった光が屈折して見えるという。金沢総局に持ち込み、翌日の地域面に掲載された。

120G

140G

写真図版 804 彩雲

雲が虹のよう^{かがや}に輝^{かがや}いて見える「彩雲」を ← ← ← 平成23年5月8日、松野忠男さん(石川県=全日写連会員)が撮影した。

130G

「彩雲」は、晴れた日、太陽のそばに薄い雲がかかった時、雲の粒にあたった光が屈折して見える^{きしやくせつ}気象現象である。

『朝日新聞』平成23年7月16日付 <彩雲>参照。

(大阪版)

子に紆むとして櫛椽(赤子のきもの)を乞ひ、夫に被せ

んとして練綬を尋ぬ。

夫に縁ること紫燕の如く、子を愛すること斑雉に似たり。

鬚鬢幽果に栖霞、雌雄故籬に処り。

籬傾きて声喃々たり、巢覆りて啜答々たり。

夫は芸能猶劣ければ、婦の貞潔最早し。

君(光孝天皇)は前だちて我は後れ、子は傷みて夫は殘

びたり。

父母は喪して抛あらず、夫兒殞びて依なし。

涙を捫ひて臥して恻惻へ、腸を断ちて起きて喟呻ぶ。

片時も袂乾き難く、長夜も枕敲て易し。

愁気は心府に余り、憤神は胸腋に満つ。

永く往生の錢を牽いて、忽ちに発心(菩提心を起こすこ

と)の餐を致す。

西方の尊は我を導きて、引接相違はざらむ。

中道の教は我を憐みて、慈哀背跋ることなし。

凡、仏乘を讀へんがために、筆をとりて斯詩を作る。

(「小野小町追跡」片桐洋一、笠間書院、三三〇頁より一

部のみ適宜抜粋)

つまり、

光孝天皇が、あまりにも小町を寵愛されるものだから、

5,534P

11代
31頁
抄
11
11
11

君臣の子孫が妙麗の娘を求めようとしても、父母は許

さず、「唯王宮の妃として献りたい」と願った

という情況(この当時の世相)が述べられているように思

える。

とすれば、どことなく、白楽天(白居易)の『長恨歌』

に似ている部分がある。

唐の国の絶世の美女『楊貴妃』と、日本の国の絶世の美

女『小野小町』とが、...時と国の違いがあるにせよ、強

く関連付けて考えられていることがうかがえる。

白楽天は、『長恨歌』において、引き続き概略次のよう

に歌っている。

驪山の宮殿は高く青空をしのいでそびえたち、そこに奏

せられる妙なる楽の音は風に漂い四方に伝わって聞える。

ゆつたりと歌い、ゆるやかに舞う貴妃の歌舞に合わせて、

管絃のしらべが流れるようにかなでられ、皇帝は終日見て

もなお飽き足るといふことがなかった。

ところが、楊貴妃と結んでその養子となった安禄山が、七五

五年、突如謀反を起こした

滄陽(今の北京地方)から進撃する戦鼓の響きは地をゆ

り動かさんばかりに轟き、十五万の大軍が都(長安)に攻

5532
上154
181頁
14行

192

「彩雲」を ← ← ←

め上ってきた。

千の兵車、万の騎兵から成る官軍は西南の蜀都を目指して出発した。だが、長安の西方百余里(馬嵬坡)で、天子

直屬の全軍はどうしても進まなくなった。

ここに皇帝は、安祿山の乱の遠因ともなった楊貴妃に、

死を賜わった。

花のようにたおやかな美人は、皇帝の馬前で殺され、

花鈿(花かんざし)・翠翹(かわせみの尾の髪飾り)・玉搔頭

(玉で作ったかんざし)などが地上に散った。

月日は移り(蜀にあること二年。官軍が賊軍を破って長安

を回復したので)、玄宗皇帝は上皇として、長安の都へ御還

幸になった。

しかしそこに、楊貴妃の姿はなく、思ふ人のたましいは

夢にさえも訪れてくれなかった。

唐の玄宗は、馬嵬が原で死んだ寵姫楊貴妃のことを忘れ

かねて、方士に魂魄の在處を探すように命じた。

方士は、天上国から黄泉国までくまなく尋ねても見出せ

なかったが、…そんな時、

「海上に仙山があって、その山は大海の広々としてかすか

な中にある。玉のごとく光り輝く樓閣に五色の雲がたなび

き、そこには、しとやかな仙女が多く住んでいる。其の中

5,535 P

に、字を玉真という者がおり、雪のような膚や花のような

かんばせは、どうやら探し求める人のようだ」

と聞いた。

方士が蓬萊宮に来ると、貴妃は玉の簾をおし開いて現われ

た。その玉のような美しい面には、悲しみの色が見られ

た。太真(貴妃)は、情のこもった眸でじっと見つめながら

皇帝への御挨拶をことづけて言う。

「一度お別れして以来、お声もお姿も拝することのできな

い遠いところへ来てしまいました。昔昭陽殿の内でお受け

いたしました恩愛の情も今は絶え、ここ蓬萊宮の内に移り

住んでから、もう長い年月がたちました。ふりかえて人

里のあたりを望み見ましても、なつかしい長安は見えず、

塵や霧がもうもうとして見えているのが見えるだけです。ただ昔

をしのぶ形見の品々を差し上げ、私の深い心のしるしと致

しました。このかつて皇帝から賜わった

青貝細工(螺鈿)

の香盒と金のかんざしを持って行って頂きます。かんざし

は片方の脚を、香盒(香料を入れる容器)は蓋と身のうち

の一方を留めておきます。こんなふうにすれば、天上にお

いてか地上においてかは分かりませんが、とにかくきつと

相見える機会がございます」

動かさない。

116

方士が別れ去るに際して、太真は再び（玄宗への）言葉
を託した。その言伝ての中には誓いの文言があり、これは
玄宗と貴妃の二人が心に知っているだけのものではあつた。

それは、天宝十年（七五一）の七月七日、七夕の日の夜
半、長生殿（玄宗が楊貴妃を伴つて来訪した驪山の離宮）で

他に誰もいない時に二人がささやき交わした際の、

「もし空を飛ぶ鳥に生まれ変わつたとしたら、雌雄がつか

いにならなければ飛べないという比翼の鳥となるう。もし

地上に生える樹となつたならば、枝と枝とが連なつた連理

の枝となるう。（こうして、二人はいつまでも離れまい）」

という誓いだった。

永久不変といわれる天地さえ、いつかは尽きることもあ

らう。

しかし、この誓いが実現されないまま、相思の二人が離

れ離れになつていくという恨みは、決して尽きることなく、

いつまでも続くであらう。（漢詩「藤野岩友、旺文社、二

九一三九頁参照）

すなわち、白楽天は、

楊貴妃の魂魄（靈魂）は、東海の海中に絶在する蓬莱宮

に移り住んだ」と歌っているのである。

5,536^P

そこで、玄宗皇帝に寵愛された絶世の美女「楊貴妃」は、

…極めて自然に、光孝天皇に寵愛されている絶世の美女

『小野小町』と結びつけて考えられることとなつたように

想像される。

①なお、先述のとおり、白楽天は元和元年（八〇六）頃

『長恨歌』を作りはじめたというのに、…小野篁（八〇

二〜八五二）は、早くも白楽天（≡白居易）の影響を受け

たのだった。次のように説示されている。

「小野篁は、惟良春道と共に、白居易の影響を受けた最も

早い詩人。『扶桑集』の作者である。『西道謡』『謫行吟』

の詩作があつたが、伝わらない」という。（『國書総目録』岩波書店〈小野篁〉参照）

②また、『長恨歌』が『源氏物語』に与えた影響は著しく、

ことに桐壺巻では単に語句だけでなく、その構成上の参考

になつたと思われるところもある。

さらに『長恨歌』は、『枕草子』、『平家物語』、『源平盛

衰記』、『十訓抄』、『太平記』、『和漢朗詠集』、『謡曲』『楊貴

妃』、『皇帝』、『琴曲』、『長恨歌』などにも影響を与えた、とい

う（漢詩「藤野岩友、旺文社、二三五、二三八頁参照）

*

ところで我々は、

●「小野小町」という名を聞けば、「絶世の美女」という

言葉を思い浮かべ、

●「絶世の美女」と言えば、ただちに「小野小町」の名を

思い起こす。

つまり、「小野小町」と「絶世の美女」とが、非常に強

く直結している感がある。

一体どうしたわけで、そんなことになったのだろうか。

●世間のごく一般的な心情面から言えば、

「采女あるいは中臈女房として宮仕えしていた一人の女性

を、——日本国中の老若男女全てが異口同音に『絶世の美

女』と呼び、誉めちぎって絶讃する筈など、決してあるま

い」

と思われる。

●また、誇り高き宮中の高貴な女性達さえも、小野小町が

『絶世の美女』と呼ばれていることを黙認したように見受

けられ、この当時の尋常ならざる様子が察せられる。

■平安朝以降長きにわたり、『小野小町』が美女達のなか

でも特に際立って美しい輝くばかりの『絶世の美女』を指

す愛称ともなっていることに、誰も異論をさしはさまない

ところを見ると、……必ずや小野小町は、かなりの高位

『妃の位』にまでのぼったのであろう、と想到される。

5,537^P

止雨の和歌 (日の本、ざりとは又あめが下とは)

それにしても、なぜかしら、——今年、仁和二年(八八

六)の夏から秋にかけて天候不順で、雨が多かった。

『三代実録』から抜粋してみよう。

●五月十日条に、「自」去七日大雨。河水漲溢。人馬不

通」

●五月二十三日条に、「大雨」

●五月二十六日条に、「降」雨」

●六月十三日条に、「自」今月朔「霖雨。京師飢困。開

倉廩「賑」之」

などである。

●さらに、八月四日から七日まで霖雨が降り続いたとい

それでここに、予め、——秋八月七日条を引き写して

おくことにしよう。こう記されている。

「七日癸丑。自」去四日「霖雨。至此」大風雨洪水。分

遣使者於賀茂上。下、松尾、稻荷、貴布祢、丹生河上六

社。奉「祈」止雨。告文曰。天皇詔旨止

掛畏松尾大明神「廣前」(御前)「申賜」止。方「今秋」稼

登熟「時奈」。大神乃厚護「依」天。不起。天。五穀

史料による日本の歩み 245^P下 357

〈それはそうと、朕の行幸に、大勢の朝臣達がぞろぞろついて来たのでは、興を削ぐ。…なんとかならないものだろうか〉

こうしたわけで、光孝天皇は、朝臣たちを六つに分け、六つの神社で『止雨』の儀式をとり行なうことにされた。賀茂上・下、松尾、稻荷、貴布祢、丹生河上の六社である。

当然ながら、『丹生河上神社』へ追隨してくる者達の数は少なくなる《勘定である。

「皆、よく聞くがよい。昨日、今日、明日の三日間降り続いて、さらに明後日の八月七日になってもまだ雨が降っていたら、『雨が止むように』と祈請せよ。朕も、今から『丹生河上神社』へ行幸し、あさってになってもまだ雨が降り続いていたら、『止雨』を祈る」

こう言うと、光孝天皇は、小町の乗った牛車に乗り込まれた。牛車は、雨の中を、ただひたすら南を指して駆けていった。雨はいっこうに止みそうになくて、いよいよ強くなっていくばかりであった。そして、時折り、烈風までが吹き付けるようになっていた。

明日の日の、あさる

5,539P

天の行 追加

長雨をもたらす秋雨前線に引き続いてやってくる台風の影響だったのかも知れない。(天体・気象「原色学習ガイド」図鑑、学研、一四七〜八頁。「世界大百科事典」平凡社〈台風〉参照)

第48回 秋前線に引き続いてやってくる台風

ともあれ、光孝天皇と小町を乗せた牛車は、『丹生河上神社』に着いた。それは、八月七日のことであつたらうか。雨足は一段と激しさを増し、風が山の木々を揺すっていた。

ここに、光孝天皇から《和歌を詠むように》と促された小町は、祭壇の前に立ち、神に祈りをささげた。厳粛な時が流れていった。

やがて、小町は歌い出した。ことわりや日の本ならば照りもせめざりとはは又あめが下とは

『日の本』という我が国の国名からいって、日が照るところを道理というものでありましょう。ところが、ざりとてはまた『あめが上』でなくて、何と『あめが下』とも申します。このように、この世を『天下』(雨が下)ともいふので雨を降らせておいでなのかも知れません。しかし、

そろそろ、「ことわり」通りに雨上りをお願い致しとう存します」

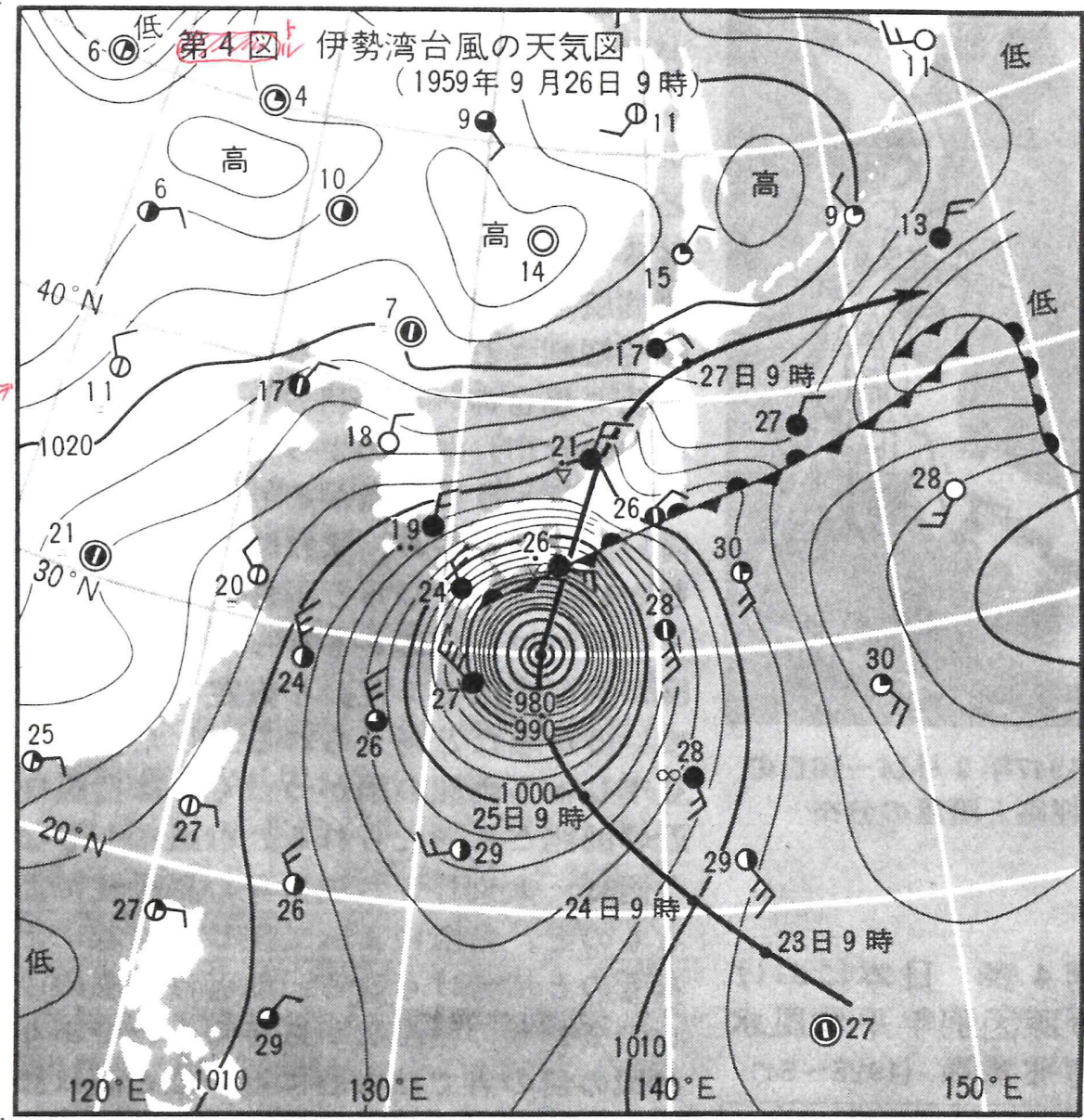
これは△の已然形である。先述の小町の歌

5,540^F

小冊子 2版 235頁下台所

上頁の右上(1/4頁)に、
限度一杯はみ出して
大きく掲載下さい。

特例として、
枠をつけて
おきたい。



13QG

14QG

第548図 秋前線に引き続いてやって来る台風の例

12QG 『世界大百科事典』19 平凡社 1972年4月25日発行 183頁参照
心づく、幾分小さい台風が、近畿地方をかすめたのであろう。

198^F

カラー

頁の左上(4/4)〜に大きく掲載下さい。

和日H24(2012)
水よ静まれ 52年ぶり白馬

水みづの神かみをまつる祭まつり景けい下した 市町しちの丹生川上神社下社にぶがわがみの東あづまの日記にっしによると、1450年から562年ぶりに白馬を献上する神事が復活した。参加者らは、昨今、震災の被災地、茨城いばらき稲敷市いなづかで競走馬の牧場半島を襲った台風12号豪雨を経営する若松昌一さん雨の被災地の復興を祈った。神社では奈良時代の760年(6)が津波や豪雨被害からの復興を願い、皆元久宮司しに申し出て実現。約3年からの雨乞いや雨止め祭まつりの国家的な祭りが行われ、市の乗馬クラブから借られた雨乞いには黒馬、雨止めには白馬が朝廷から献上を祈った。(塚本和)



500年ぶりに白馬が献上された
1 早前、奈良県下市町、佐藤選手撮影

5,541¹

1400G

写真図版 805 丹生川上神社下社での止雨の神事

1200G

丹生川神社下社で、平成24年6月1日、562年ぶりに白馬を献上する神事が行われた。(皆で拝礼しているところを示す)

室町時代の1450年の止雨を最後に、神事の記録は無い。

1300G 朝日新聞 平成24年6月10日付 水よ静まれ 562年ぶり白馬へ参照

61

室町時代 1393年~1593年

追加

HL

「君」来ませば「待」もこそせぬ「参照」

■もつとこの歌は、その情況を知らなければ、『雨乞の

和歌』であるかのようにも見受けられる。

通常、次のように「理」に解されている。

「我が国を日の本と称すからには、日照りが続くのは当然

です。しかし、一方、この世の中HLを天下（雨が下）

とも申すではありませんか。そう考えれば、少しくらい降

らせて下さってもよいという気持もいたします」（小野小

町追跡「片桐洋一、笠間書院、七四頁参照）

「止雨を祈る歌」で、『止雨を祈る和歌』のように

も受け取れるし、……まったく正反対に『雨乞の和歌』の

ようにも思えてくるのである。

■いやそれだけではない。

この歌は、〈雨を降らせないでほしい〉とか、〈雨を降ら

せてほしい〉とか、明確に述べているわけではないのだか

ら、——『止雨』・『雨乞』とは全く無関係に、『日の本』

と『あめが下』という言葉のおもしろさを歌っているだけ

小町は、どうしてこのような不明瞭な歌を作ったのだろ

うか。

くもしも、去る八月四日からこの日（八月七日）までのわ

5,542^P

ずか四日間つづけて雨が降っているというだけのこと、

六つもの神社に幣を奉り、しかも、大仰な『止雨を祈る

和歌』を詠んだとしたら、——もしかししたら、天帝はお怒

りになるかも知れない

そこで小町は、巧妙にも神の御心をなごませるような機

智に富んだ和歌を作って、奏上したのではなからうか、と

想像される。

その後、白馬一疋が献上された。

尚、「大風雨洪水」の被害があったものの、……小町が、

「止雨を祈る歌」とも受け取れるし、そうでないようにも

思える「おもしろい歌」を詠んで、神々の御心をやわらげ、

微笑をさそったからであらうか、次第次第に、風も雨も、

おさまっていった。

* 参考返に述べると、本居宣長（江戸中期の国学者）は、

小町ノ「コトワリヤ日ノ本ナラバテリモセメサリトテモ

又アメガ下トハ「コレ全ク実情ナルニアラズ。雨ト天トヒ

トツ也ト心得ルホドノ小児ニテハナケレド、天ガ下ヲ雨が

下ト心得タルヤウニヨメル。ココガ偽リニシテ、シカモ此

歌ノ趣向也。歌ニ感ジテ雨フレリ。

（あしわけをぶね）

と趣向をほめ、雨もそれに感じて降ったことだろうと解している。

つまり、本居宣長は、これを小町の歌として扱っている。
しかし、尾崎雅嘉（江戸後期の国学者）は、『百人一首』

夕話』において、

小町が雨乞の歌として、

ことわりや日のもとならば照りもせめ

さりどてはまたあめが下とは

といふ、てにをほも合はざる拙き歌を世にいひ伝へたり。

これは、慶長の頃或者の詠みたる狂歌の由、雄長老の狂歌

百首といふものの附録に見えたり。云々、

と述べている。

●また、柳亭種彦（江戸後期の戯作者）は、

今の俗に小町の雨乞の歌といひつたふるは、さまで古き

草子に見えず、『新撰狂歌集』下の巻（雄長老元和年間の撰

に、

ひでりの年、さる人のよめる

ことわりや日のもとならばでりもしつ

さりどては又あめのしたとは

とある。ここに、「さる人」とかけるも、実は撰者の歌に

て……

5,543^P

と述べ、江戸時代初期の狂歌師雄長老の作だとしている。

〔小野小町追跡〕片桐洋一、笠間書院、六九（七七頁参照）

あるいは、『雨乞の歌』として「てにをほ」を整える爲

に、江戸時代初期の狂歌師雄長老が作り変えたのかも知れ

ない。

*

一方、歌舞伎十八番の「毛拔」においては、以下の

やりとりが演じられる。

勅使桜町中将清房は、小野春道・春風父子のもとへおも

むいて、こう言った。

清房「このたび天下早敷について、万民の苦しみ君にも

なげかはしく思召し、——小野春道の重宝、小野小町雨

乞の名歌『ことわりや……』の短冊は、すなはち小町直筆、

先年雨乞ひのせつ、神泉苑池に浮かめたる所に、小町が名

歌に天も納受あって、たちまち車軸の雨を降らし、四海太

平に納まる。其の古例にまかせ、『ことわりや……』の

短冊を神泉苑池に浮かめ、雨乞ひをなせば、雨の降らむこ

と、まのあたり。いそいで其の短冊を禁廷へ差しあげられ

よ、との勅諭でござるぞ」

春道「是は有難い勅に預り奉りましてござりまする。小野小町の、私方は三代。君の高恩あつくして、家名繁栄

いたしまする所に、先例にまかせ、『ことわりや…』の短冊をもって雨乞ひをなされんとは、末代までも小町がほまれ、末流の我々が身にとり、有がたう存じ奉りまする。春風、いそいで宝蔵の短冊持参つかまつて、勅使の御覽に入れてよからう』

と言った。

先年、長期間つづく旱魃により、天下の万民が苦しんでいた。おそろく、有名な貴僧・高僧の祈願が神泉苑で行なわれていたのであるが、ききめなく、どうしようもない

時、小町の『ことわりや…』の短冊を池に浮かべたところ、和歌の力によって、車軸のごとき雨（車軸のような太い雨のことで、大雨の形容）が降った、といっているので

ある。（小野小町追跡「片桐洋一、笠間書院、六九〜七〇頁

参照）

なお、短冊を入れた器を、神泉苑池に浮かせたのであらう』と思われる。

ところが何と、この短冊が紛失しているところから事件は始まる。

*

■それにしても一体どうして、『ことわりや…』の歌が、

5,544^P

『雨乞の和歌』であると一般に解釈されることになってしまったのだろうか。

もしかししたら、次のような経緯があったのかも知れない。『絶世の美女小野小町は、名指しされて『雨乞の和歌』

を歌った。するとその和歌のおかげで、たちまち恵みの雨が降った』

といったことが、宮城の外にも漏れ伝わった。

●引き続き、小町が、

ことわりや日の本ならば照りもせめ
ざりとしては又あめが下とは

という和歌を詠んだ、という噂がバツと世の中に広まった。その和歌は、実に機智にとんでいて、しかも調子が良く、誰もが容易にそらんじることの出来る大衆向けのするもの

だった。

●天下の人々は、全く疑念をいだくことはなかった。
「小町が作った『雨乞の和歌』とは、この歌に違いない」

と思った、
という次第なのではなからうか。

●こうしたわけで、庶人の間で、

〈「ことわりや…」の歌は、小野小町が『雨乞の和歌』として詠んだものである〉

ということとなってしまったように解される。

しかし、いままでもなく、その真相については分からな

い。

*

①因みに、さらにあえて述べてみたいことがある。

①安倍清行朝臣への小町の返歌

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす

我はせきあへずだぎつ瀬なれば

の歌においては、冒頭の「おろかなる」が強調されている。

②同様に、

ことわりや日の本ならば照りもせめ

さりとは又あめが下とは

の歌でも、冒頭の「ことわりや」が強調されている。

小町は、気持の上では、

「ことわりの通りに日が照ってほしい」

と歌ったのであろう、……と推察される。

あなめあなめ (あなにくあなにく)

丹生河上神社を後にした光孝天皇と小町の一行は、丹生

川沿いの山道を下り、吉野川を渡り、そして金剛山地の東

麓に沿って北上していった。

こうして、煌やかな行幸の一団は、葛城川上流域の深谷

が開けて急に明るくなるどころ、御所の「室」へとやって

きた。

●そこは、孝安天皇の「葛城の室の秋津嶋の宮」があった

ところである。(孝安記、孝安紀参照)

●なお、雄略紀四年八月二十日条には、「蜻蛉野」とあり、

——「あきづのをの」と訓まれている。(日本書紀) (出)

本古典文学大系、岩波書店、四六八頁参照)

*

第九十六章〈世にも恐ろしい形相の大男〉の項において

詳しく述べたいが、——ここに予め、簡単に触れておきた

いことがある。

■陰暦夏六月頃に丹波方面の山々の上へもくと立ち昇

る入道雲のことを、「丹波太郎」と称したという。(広辞

苑「丹波太郎」他参照)

例をあげると、井原西鶴の『好色一代男』(巻四)に、

「折節の空は水無月の末、山々に丹波太郎といふ村雲おそ

ろしく、俄に白雨して、神鳴臍をこころ懸け、云々」

とある。(井原西鶴集「日本古典文学全集、小学館、一九八

頁参照)

いつ頃からなのかは明らかでないが、畿内一円に住む者

達は、北の方、丹波の山の上に立ち昇ってゆく人道雲を見

て、
《世にも恐ろしい大男が、頭をもたげ、——そして腹部
(臍あたり一带)に相当する所『京都』をめざして神鳴をこ
ころ懸ける》
と考えたのではなからうか。

■『腹部』のように起伏の少ない、広大な京都盆地のほぼ
中央、加茂川と桂川とが合流するあたりの河原を、

昔、「左比の河原」と呼んでいたとい、——「賽の河原」
(小児が死んでから赴くとされる冥途の三途の河原)とは、こ
の「左比の河原」のことであろうと解されている。(『世界

大百科事典』平凡社《賽河原》。「地蔵菩薩」紀野一義、集英社、
三八頁。「広辞苑」《賽の河原》参照)

この物語では、仮りに、
《左比の河原(賽の河原)とは、——もともと平安朝こ
るには、「臍(へそ)に相当する巨椋池にほど近い河原」

と考えてみたい。
先に述べたように、九州地方から近畿地方へ移住した
人々は、……九州の『臍』というべき阿蘇山に相当する所

として、

5.546^P

この行仲は、

①最初は、「奈良県の三輪山」

②次いで、「三重県名賀郡青山町阿保の小丘」(地震の神を
鎮祭している大村神社のある小丘)

を見たのであろう、と想像される。(第四十八章《望
郷》。第六十五章《倭姫命の『周一行天下』》。第九十五章

《乳母》の項等において既述)

しかしながら、①②共に、近畿地方の大男の『臍』と見
なすには、もう一つ納得し難いところがある。

そこで、平安京に遷り住んだ人々は、「三輪山」や「阿
保の小丘」に固執することなく、

③京都盆地の南半部にかつてあった「巨椋池」を、近畿地
方の大男の『臍』とみなし、

④京都盆地を流れる幾筋もの川を、大男の腹部の『皺』に
見たてたのだらう、

と推察される。

また、すでに述べた

- 「臍で茶を沸かす」
- 「臍が茶を沸かす」
- 「臍が宿がえする」

岩波書店「昭和五十七年十月十五日」
第二版補訂版「第七刷発行」

などという謬がある。(『広辞苑』《臍》参照。第四十三章一九九頁
《御神火》の項において既述)



- 景行天皇は、「^{くに さき}國の埼ならむ」と仰せられた。そこで、「^{くにさき}國埼の^{おほ}郡」という。(豊後國風土記、國埼郡条参照)
- 「國の埼」とは、「國の^{さき}首」の意味なのであろう。

第17図 九州の巨人の図

近畿地方の地形の上に想像された「大男」の臍が、時の推移につれて点々と移動したことをふまえ、「臍が宿がえする」という諺が生まれたものと思われる。

さらに人々は、「近畿地方の大男の一物」は、これまで幾度も述べたように、「九州の宇土半島」に地形的に相当する所、……つまり、「金剛山から加太の方へ伸びる和泉山脈」こそ似つかわしいと考えたに違いない。

すなわち、光孝天皇・小町の一行は、近畿地方の大男の「陰室のつけね」あたりへやってきたのだった。

牛車を止めて、暫くつろいでいた折のことであつたらうか。光孝天皇は、いたずらっぽく、こうおっしゃつた。「このあたりは、丁度、大男の小野にあたるのだよ」

いふまでもなく、
「服を着ていない大男の陰室基部、恥毛(陰毛)が生えているあたりの」を、——「大男の小野」と表現されたのであつた。

小町は、はじめ何のことも分からなかつたが、……やがてそのことに思い至つた時、恥かしさに、顔をあからめてうつむいた。

天の字
改訂

5,547^P

206

〈まあ、何とということをおっしゃるのでしよう

もしも朝臣の誰かがそんなことを言つたのであれば、小町は黙殺したに相違ない。黙殺せよ

しかし、そう仰せられた御方が帝であつてみれば、聞えなかつた風をよそおつて無視するという訳にもいかなかつた。

扇のかげからそつと窺つと、帝は、小町が何と云うか待ちかねておいでの御様子でさえあつた。

〈何か、御返事をしなければいけないわ

小町は、咄嗟に思い浮かんだ歌を、……恥かしさをこらえながら詠んだ。

秋風の吹くにつけてもあなめあなめ

小野とは言はじ薄生ひけり

〔※ 謡曲『通小町』に、「これ、小野の小町の歌なり」と記されている) (『通小町』卅七ノ四、平成五年十一月二十五日発行、観世左近、檜書店、三頁参照)

秋八月八日の秋風が、奈良盆地最南端部の「蜻蛉野」あたりを吹き渡り、薄の穂を波うたせていたことであつたらうか。(写真図版 806 参照)

● なお、『あなめ』は、「あなにく」(あやにく)あるいは「あな、目痛し」の意であるといひ、「あな」(あや)は、

8月7日 小野小町 195頁 下巻 1行

241

5.548P

・カラー
・左頁の上半分
大きく掲載
下さい。



写真図版 806 ススキ

はなと ^花 ^と なかのまひろ
『花を撮る』 中野正皓 主婦と生活社 1999年発行 143頁参照

喜怒哀楽（驚き。感動）を感じて思わず発する声であると

いう。（広辞苑）〈あなぬ〉〈あなぬ〉〈あや〉〈参照〉

●ここでは、『あなぬ』を「あな憎く」の意味に解すこと

にした。

おそらく小町は、次のような意味を込めて歌ったのであ

らう。

「この蜻蛉野を秋風が吹きわたってゆきますが、秋風が吹

くにつけても、まったくのまる裸形であって服をつけてい

ないこの大きな男の人は、あな憎くあな憎く、なんと醜い

（見憎い）のでしょう。それにしても、遥か彼方まで薄が

生い茂って風になびいているこんなにも広々とした大草原

の~~むら~~を、小野などとは決して言いません。

そして貴方様は、あな憎くあな憎く、なんと憎らしいこ

とを仰せになるのでしょうか。小野などとは言わないで下さ

い。小野でない証拠に、背丈以上もある薄が生い茂ってい

るではありませんか）

光孝天皇は、大きく頷き、声高にお笑いになった。なか

なかに、御満足の御様子であった。

ところが、いやはや大変なことになってしまった。たい

そう具合の悪いことに、――その一部始終を、臣下の者達

が固唾を呑んで見守っていたのだった。

5,549

いまさら、取り消すことが出来得ようか。
口さがない連中は、おもしろおかしく語り伝え、……そ

していつしか、

●小町といえば、「あなぬあなぬ」の歌、

●「あなぬあなぬ」の歌といえば、小町、

を想起する程までになっていたようである。

*

この「あなぬあなぬ」の歌は、人々の心を引きつけてや

まなかった。

多くの者達が、この歌を本歌として、数々の類似の歌を

作った。

■たとえば、謡曲『通小町』には、

「八瀬の山里で一夏を送る僧が、毎日本の実などを持って

来る女に名を尋ねたところ、――その女は、

恥かしや己が名を小野とは言はじ

薄生ひたる市原野辺に住む姥ぞ

と答えて、かき消すように失せてしまった。

とはいえ小野小町の

秋風の吹くにつけてもあなぬあなぬ

小野とは言はじ薄生ひけり

という歌を思い合わせると、疑う所もなく只今の女性たにまには小

野小町の幽霊だと思われた」
といったことが記されている。

■また、『小野小町集』二種（異本系）六十八には、

17.94 陸奥の思ひもかけぬ所に歌よむ声のしければ、おそ

ろしながら、寄り聞けば

秋風の吹くたびごとにあなめあなめ

小野とはなくて薄おひけり

ときこえけるに、あやしとて、草の中を見れば、小野小

町が薄のいとをかしうまねきたてりける。

とある。（小野小町退跡」片桐洋一、笠間書院、二二二頁参

照）

■さらにまた、

「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ」

の歌は、鬮腰の歌としてよく知られている。

鬮腰の歌は、『江家次策』にあるのが最も古く、その外、

「古事談」や『袖中抄』などに見えている。

大江匡房（一〇四一〜一一二一）の公事故実書である

『江家次策』の第十四「后宮出車事」の条に、「二条后に関

連して在五中将（在原氏兄弟のうちの五男の意から在原業平

の異称）の話に及び、ついでに小町のこと記されている。

或は云ふ、在五中将、件の后を嫁ひたる為に出家して相

小野小町
251頁

5,550 P

構ふ。其後髪を生ほさんが為に陸奥国に到り、八十島に

向ひて小野小町の屍を求む。夜、件の島に宿るに終夜声

有りて曰ふ

秋風の吹につけてもあなめあなめ

後朝之を求むるに鬮腰の目の中に野の薄有り。在五中将

涕泣して曰ふ

小野とは曰はざ薄生ひけり

とある。（謡曲「通小町」観世左近、繪書店、一頁。「小野小

町退跡」片桐洋一、笠間書院、二二二頁参照）

ともあれ、「あなめあなめ」の歌と、小町とが、強く結

びつけて考えられていたことが分かる。

*

なおここに、ほんの参考迄に述べると、万巻十一二九

二に、

秋津野の屋花刈り添へ

秋萩の花を草かさね君が假廬に

〔大意〕秋津野のすすきの穂を刈り添えて、秋萩の花をあ

なたの仮小屋の屋根にお書きなさい。

という歌がある。

「秋津野」と「すすき」（尾花）とが歌い込まれていて、

興味深く思われる。

やがて、光孝天皇と小町の一行は、「飛鳥川」のほとりへやってきた。**807** (写真図版) 飛鳥川 (参照)

奈良盆地の東南隅の明日香村を経て北流する「飛鳥川」は、ここ数日間降り続いた雨で水嵩を増し、——今、激しい勢いで流れ下っていた。

そして、渦巻いて流れる「飛鳥川」には、処々に淵(水が溜んで深い所)が出来ていた。

因みに述べると、『古今集』卷十八・九三三に、世の中はなにか常なるあすか川

昨日の淵ぞ今日は瀬になる

(読人知らず)

という歌が載せられている。

「この世の中では、何が常住不変のものだろうか。飛鳥川

の昨日の淵がもう今日は瀬に変わるといふ有様では、何かあすのことを保証できるものがあるだろうか)

といった意味である。

この歌は、昨日—今日—明日という語により、時の流れとともに全てが流れ去ってしまうことを暗示し、音の響き

もまた流れるように歌の内容にふさわしい。〔古今和歌集〕

5,551 P

日本古典文学全集、小学館、三五二頁参照)

たぶん光孝朝当時、この和歌は、……「飛鳥川を世の無常のたとえ」とする本歌として有名だったのであろう。

小町は、この歌を思い起こし、一つの歌を作った。

世の中は飛鳥川にもならばなれ

君と我どが中し絶えずは

(群書類従本「小町集」八四・異本なし)

「飛鳥川の流れは急激に変化して、昨日の淵が今日は瀬になるというが、世の中は飛鳥川のように、無常であっても

いいわ。貴方と私との中だけが絶えなければ、それでよいのです)

なんとも思い切った言い方をしたものである。まさしく情熱的に、燃えに燃えている感じである。〔小野小町遺跡

片桐洋一、笠間書院、一五二頁参照)

それでは、小町は、何故こんなにも情熱的な歌を作った

のだろうか。

光孝天皇に愛されている、という嬉しさを歌っただけに

しては、あまりにも激しすぎるようである。

おそらく、光孝天皇の寵愛を一身に集めている小町を

「呪咀」(神仏に祈願してうらみに思う相手のすること)す

る者が、大勢いたのであろう。〔玉造小町子壮衰書「参照

5,552P

・カラー
・頁の上半分に
大きく掲載
して下さい。



写真図版 807 ^{あすかがわ} 飛鳥川

『飛鳥』朝日新聞社、昭和47年10月～48年4月開催「飛鳥展」用の図録、7頁参照

しかし、二人の仲(中)を引き裂こうとすればするほど、恋の炎は燃え上がった。~~たまたまに思われる。~~

「君と私との仲が絶えないのであれば、世の中は飛鳥川のように無常に、なるようになればいい。たしかに、世の中は明日のことも分らないけれども、君と私との仲だけは絶えないでほしい」

こうした思いを込めて、小町は歌ったのではないだろうか。

なお、「飛鳥川」は、小町が歌った時には、水嵩が増していた。~~思われる。~~

「貴方と私との中だけが絶えなければ、……世の中は無常に、なるようになればよい」

と歌った時に、浅瀬であったとは考えにくいからである。

素性法師

飛鳥川を渡った牛車は、石上の布留の地を目指した。

光孝天皇(時康親王)が、「少年のころ過ごした布留を訪ねてみたい」

とお思いになられたからだった。

小町にとっても、布留は、思い出深い所であった。

さて、石上寺に詣でた時には、秋の日が早くも暮れかかっ

ていたので、ここに一夜を過ごし、夜が明けてから都へ帰ろうということになった。

そんな時、誰かが言った。

「此寺には、僧正遍昭様の御息、素性法師が幽居して

るやに聞いております」(第549回)素性法師(参照)

ここに、小町は筆をとって歌をしたためた。

石上寺にまうで、日の暮れにしがば、とまりて、

そせい法師に言ひやりし

岩の上に旅寝をすればいと寒し

昔の衣を我に貸さなむ

かへし

よをさむみ昔の衣はただ一重

貸さねばうとしいぎふたり寝む

(小野小町集「二種、異本系、神宮文庫蔵」)

小町の来意を告げる歌を受け取った素性法師は、さすが

遍昭の子である。——光孝天皇と共に小町が来ていること

を知っているから、あえて、

「いぎふたり寝む」

と返事したのであろう。

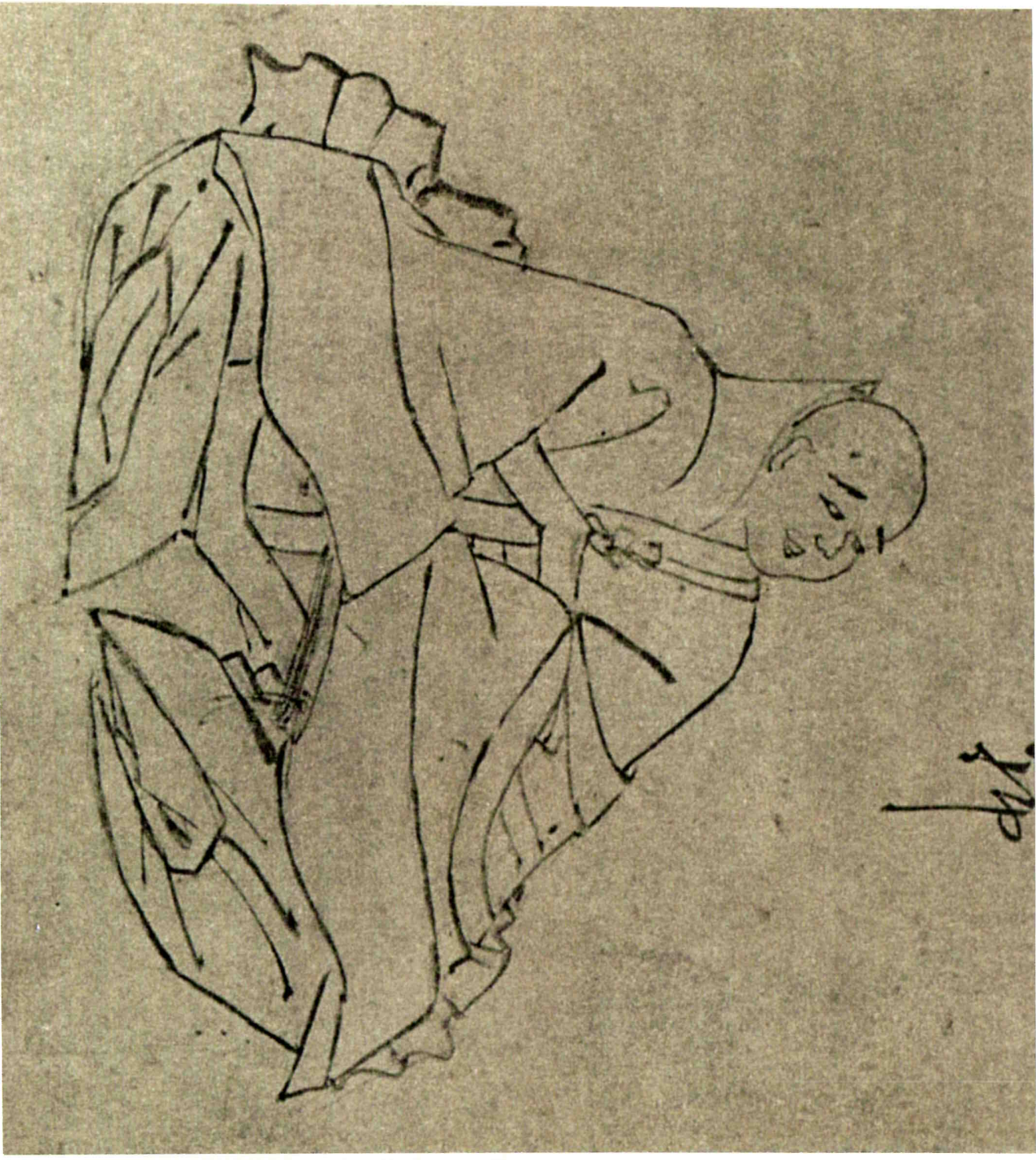
また、素性法師の心の内に、

〈父遍昭の歌を大きくは変えたくない〉

5.553 P

・カラーで印刷して下さい。
・表紙の上半分に配置。
（おみか）

2/2^P



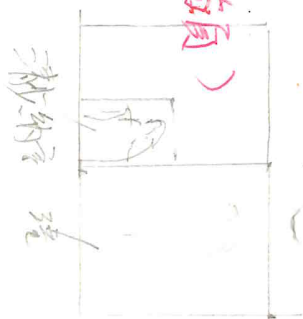
5,554 P

1424 第549 図 素性法師（素性）〔為家（たけいえ）（白描）本三十六歌仙繪〕

1324 『日本繪巻物全集』三十六歌仙繪、角川書店、昭和42年12月30日発行、51頁参照

堀下川50 素性
藤原 為家

・カラー
 ・右頁に大きく掲載して下さい。



1304

・カラー
 ・右頁1面に大きく掲載下さい。

5,556^P



1424

写真図版 808
 『^{ふる}布留の^{たき}滝』 (木^{おの}尾の滝とわい)

1304
 平成18年7月4日 著者撮影 ← 中心より右

著者撮影
 新1巻 136頁

5枚にわたる

カラー
左頁の右下1/4に、はやくはやく 限定一杯大人掲載下刊。

↑ 顔の色は白
下刊。

5,557P
5,557P

上村松園
(1875~1949)
死後50年経
た「TIN」から
著作権が著
者は不要。



1104 (宮内庁三の丸尚蔵館所蔵) 上村松園(筆)
1404 第550回 清少納言

1304 『朝日新聞』平成25年12月13日付(夕刊) 上村松園「雪花」のうた「雪」(1937年)
参照

由5720-2名紫式部の絵